Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-11

中年期～老年期の発達を捉える視点についての一考察 ： 社会情動的選択性理論の適用

濱田, 綾
齊藤, 誠一

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,14(2):79-84

(Issue Date)
2021-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012657

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012657

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要
第14巻第２号　2021

研究報告

中年期～老年期の発達を捉える視点についての一考察
―社会情動的選択性理論の適用―

A study on the viewpoint to understand development from middle to old age
- Application of Socioemotional Selectivity Theory -

濱田　綾*　　齊藤　誠一**
Aya HAMADA*　　Seiichi SAITO**

要約：超高齢社会となった日本において，老年期を生きる高齢者は心身共に「若返り」の兆候を見せている。しかしながら，老いていくことは避けられないものであり，「老い」「喪失」「死」をどのように人生の中に位置づけるかが，発達上の課題として存在し続けている。そのため，老年期への移行期である中年期後半から老年期に関する研究の重要性はますます高まると考えられる。本稿では，中年期以降の時間的要素を含め発達的特質として時間的展望と Generativity を取り上げ，動機づけや人間関係の選好において未来の時間的展望が影響を与えることを解明する SST（社会情動的選択性理論）の有効性について，SOC 理論との比較，現在の日本での研究状況を言及しながら論じた。今後は，SST の十分な理論的検討とともに，老年期の発達的特質の解明へのさらなる活用，年齢だけにとらわれない発達的観点として定年退職など共通に体験されるライフイベントなどを説明変数とした SST 研究により，中年期～老年期における新たな知見を得られることが期待されている。

キーワード：中年期，老年期，社会情動的選択性理論，時間的展望

１．はじめに

現在，日本の 65 歳以上人口は 3500 万人を超え，高齢化率は過去最高の 28.4％となった（厚生労働省，2020）。今後，さらなる高齢化が予測される中で，老年期に限らず，老年期への移行期となる中年期後半に関する研究の重要性及び必要性はますます高まると考えられる。

中年期以降の発達段階に焦点を当てるとき，ネガティブな事象とイメージが付随しがちである（権藤・中川・石岡，2017）。その例としては，加齢に伴う生物学的能力の低下や疾患の増加，家族や友人との死別や定年退職などによる関係性や社会的役割の減少などがあげられる。かつての発達心理学においては，発達による急速な変化は青年期の終わりにピークを迎え，成人期以降は研究対象となるような発達的変化は生じないと仮定されていた。つまり，その後の変化は発達ではなく減退や加齢として捉えられていた（佐藤，2007）。実際に，視覚や聴覚といった感覚機能，筋力や柔軟性といった運動機能，判断や情報処理の速度などの認知機能は加齢とともに低下する（増本，2014）。

一方で，現在の高齢者においては，10 ～ 20 年前と比較して加齢に伴う身体的機能変化の出現が 5 ～ 10 年遅延している「若返り」現象がみられる（高齢者に関する定義検討ワーキンググループ ,2017）。また，現役を引退した老年期以降においても，生活上問題なく過ごす期間が増加していることは，健康寿命の推移を見ても明らかである（厚生労働省，2020）。さらに，身体に限らず意識においても「若返り」は生じている。「どのくらいの年齢から高齢者になると思うか」についての意識調査では，70 歳以上と回答した者が 29.1％おり，以下 75 歳以上が 27.9％，80 歳以上が 18.4％，65 歳以上が 6.4％と続いている（内閣府，2015）。これらから，身体的・精神的にも従来の高齢者イメージに該当する年齢は上昇傾向にあるといえる。

このように，現在はステレオタイプである弱者としての高齢者像とは異なった，健康で自立した高齢者が増加している。年をとっても強く，逞しく生き抜く高齢者の姿は，後進の世代にとっても今後の人生に希望を与えるものとなるだろう。しかしながら，人は誰しも必ず老いて死に至ることを考慮すれば，加齢に伴う衰えや喪失の経験，自ら自覚する「死」を人生の上で位置づけることは，中年期および老年期の重要な心理的発達課題の一つであり，特に老年期においてはより良く生きるために必要な課題であると考えられる（丹下・西田・富田・安藤・下方，2013）。高齢者の現状を反映した研究の観点として，老いることにネガティブな印象を持ち，健康を喪失し，その意志に反して弱りゆくといった従来の高齢者イメージではなく，心身の機能の衰えや低下を伴いつつも，老いつつ生きることに積極的に取り組む高齢者イメージとして捉えることが求められる。こうした生きることへの積極性には，どのような要因が関連するのかを明らかにしていくことは，今後の中年期以降の発達について理解を深めることに有用であると考えられる。本稿では，こうした老年期

＊神戸大学大学院人間発達環境学研究科大学院生
＊＊神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

（2020年９月30日　受付
2020年９月30日　受理）

の現状を踏まえ，中年期～老年期の発達を捉える新たな視点を検討していく。

２．時間的要素を含む中年期～老年期の発達的特質

(1) 時間的展望

人生後期の発達的適応の検討を行う際に取り上げられる重要な心理的変数の一つに時間的展望がある。園田（2007）は，時間的展望の過去・現在・未来という連続性という側面に，Erikson の提唱したアイデンティティが関連することを指摘している。中年期以降のアイデンティティ発達に関する時間的展望を含めた検討はこれまでにも行われており（岡本，1985；堀内，1993；宮田，2001），個人の発達を捉える意味ある重要な指標とされている。時間的展望は研究者により異なる定義が用いられているが，Lewin（1951 猪俣訳 1979）は「ある一定の時間における個人の心理的過去及び未来についての見解の総体」と定義づけており，多くの研究がこの枠組みの中で時間的展望を捉えている。また，白井（1997）は時間的展望の機能について「個人が現在の直接的な状況に規定されながらもそれから離れたり，人格や自己の統合を果たしたり，共同化を促したりする働きがあり，それによって，行動と人格の自由の獲得を可能にする」と述べている。つまり，時間的展望は，個人の動機づけや自我の発達といった広範囲に影響を及ぼし，行動を理解するうえで重要な概念である（都筑，1982）といえる。

これまでなされてきた中年期の時間的展望に関する研究から，中年期まで拡大してきた時間的展望を中年期には人生の終わりから残された時間として考えるという逆転が生じ，この時間的展望の転換が中年期における危機の１つにあげられている（白井, 2007）。また，白井（1997）は，時間的展望において青年期では未来指向の獲得が重要であったのに対して，中年期で現在指向への変化が課題となることを指摘している。さらに，柏尾（2000）による時間的指向性の年代別の比較からは，高齢になるにつれて「今・現在」の重要性が強まることが示唆されている。特に，中年期後半から老年期にかけては，職業生活における定年退職や家族関係における子どもの自立などに代表されるように，危機となり得るような転換が生じるタイミングにあり，この時期の時間的展望の変化を把握する上でこうした危機を乗り越えるという観点から検討することも重要であるといえる。

中年期以降では時間的展望における現在の重要性が高まることが示されているが，過去，未来についての検討意義を失うものではない。たとえば，日潟・岡本（2008）は，中年期の時間的展望と精神的健康について検討を行い，40 代においては過去の受容が精神的健康に影響することを指摘している。また，五十嵐・氏家（1999）は，中年期には個人ではなく，時間的展望として家族の変化を基にした将来を描いており，それらが中年期における家族関係の変化など取り組むべき課題とその対処に関連することを示している。

他方，老年期の発達に関する研究では，回想やライフレビューを用いた検討が行われており，これまでの自分の人生や過去を顧みる際の態度，評価などの語りと，主観的幸福感やモラールといった現在の適応との関連などがとりあげられている。また，白井（1997）や都筑（1982）が指摘するように，時間的展望が個人の様々な側面に影響を与えており，過去との向き合い方が現在の自身のありかたと関連していることも明らかにされている。

さらに，老年期では Erikson により自我の統合（ego-identity）が心理社会的課題になると提言されている（Erikson,1950 仁科訳 1977）。この自我の統合とは「これまでの経験，生きてきた自分の人生を受容し，死を受け入れる」ことを意味しており，老年期の回想と自我の統合の関連などが検討されている（山口, 1996）。一方, 野村（2002）は高齢者が過去を回想して述べる自己語りと心理社会的課題の達成度について検討し，整合・一貫した語りを構成することと達成度の関連を見出し，老年期においては過去の自分を想起し「意味」を与えることが自我の統合に取り組む上で大きな役割を果たすとしている。

以上のように、中年期以降の時間的展望に関して，現在の重要性が高まるだけではなく、過去や未来が，現在の自己の状態や課題への取り組みに関連することが示唆されている。

(2) Generativity（世代継承性）

従来は中年期の課題とされてきた Generativity が老年期にかけても様々な意味を持つことが報告されている（小澤，2012）。Generativity とは，「①次世代を生み出すことと育てること，次世代の成長に関心を注ぎ，関与すること，②ものを生み出すこと，創造すること，③他者を支えることなどが包含される」（岡本, 2018, p.3）ものである。Erikson 自身, 当初は主に親役割における Generativity を論じていたが, 後に子孫を生み出すだけではなく，創造性を包含する概念であるとしている（Erikson & Erikson,1997 村瀬・近藤訳 2001）。Generativity が中年期に限らず老年期においても発達するという研究結果が得られており（丸島，2000），Generativity という課題を達成することが自我の統合へ寄与することが検証されている（Hannah, Domino, Figueredo, & Hendrickson,1996）。また，これまでの Generativity に関する研究から，Generativity が適応に関する心理的変数（幸福感，自尊心，精神的健康など）とは正の相関を，非適応的な心理的変数（情緒不安定性，抑うつなど）とは負の相関を持つことが報告されているが（小澤，2012），心理社会的発達の観点のみならず，より良く生きるという点からも，中年期以降の Generativity についての多様な観点から研究が望まれる。

Generativity の理論的検討として，McAdams&Aubin（1992）は 7 つの構成要素モデルを提示しており（Figure1），讃井・河野（2014）は高齢者の Generativity を喚起させるためにはこの中の「関心」と「行動」が重要な要因であると述べている。この McAdams らのモデルでは個人と環境（文化）の相互作用により Generativity が構成されるとしており，この観点から福島・沼山（2019）は，個人が実子への養育活動だけでなくボランティアや市民活動といった社会活動によって Generativity を発達させる可能性を指摘している。

このように，中年期以降老年期に至っても後の世代を育てる点で未来という時間を指向した行動をすることが，自身の現在の課題への取り組みにつながり，個が発達していくことに寄与すると考えられる。

このように，中年期以降の時間的展望や Generativity においては，これまで重要とされてきた現在だけでなく未来についても検討していくことが，個々の発達を捉える上で必要であると考えられる。くわえて，とりわけ中年期以降の未来という時間を取り上げる際には，従来から指摘されてきた加齢にともない個人の未来を肯定的に捉え

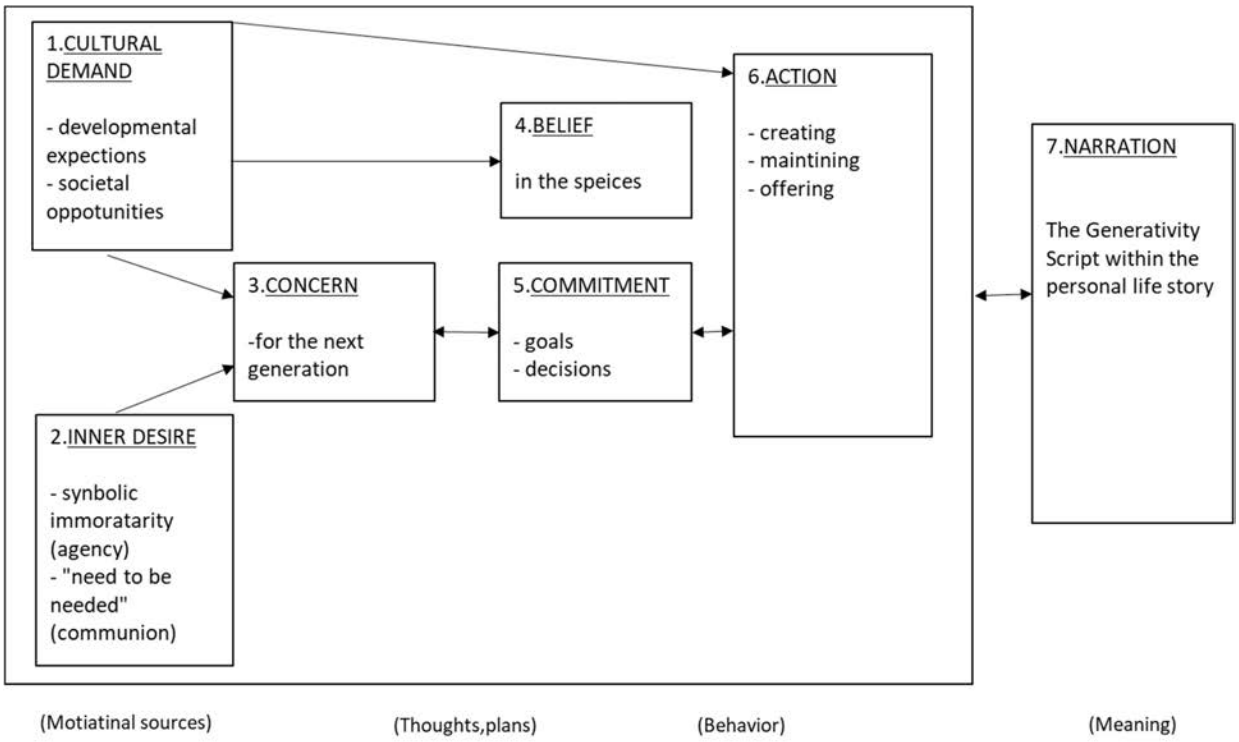

Figure 1　Seven features of generativity.(McAdams,&Aubin,1992,p.1005,Figure1)

られなくなること（Erikson，1959 西平・中島訳 2011；下仲，1988）や，高齢者の時間的展望が青年とは質的に異なること（原田，2001）などを統合することが求められる。

３．時間的要素を説明する理論的枠組み

（1）SOC 理論（selective optimization with compensation: 補償を伴う選択的最適化理論）

時間的経過に伴う老化や喪失を含めた発達を捉える理論としては，活動理論や離脱理論，継続性理論などが以前より取り上げられてきたが，代表的なものとして SOC 理論（Baltes,1997）があげられる。Baltes（1997）は, 常に獲得（gain）と喪失（lose）が同時に生じ，その力動的相互作用によって成長と老化が生起すること，その特徴を捉えることが発達を捉えることであるとし，高齢になるにつれ低下していく心身の機能や活動水準，活動範囲に対して，人は SOC 理論を適用して対処し，適応していくとしている。つまり，低下した状態に合わせて範囲や目標をより狭い領域で探索（選択）し，機能の低下を補う方法や手段を得て（補償），適応する機会を増やす（最適化）のである。加齢に伴い喪失は増加し獲得は減少するため，特に老年期においては，SOC 理論に基づく対処により人は発達的適応が可能であると考えられている。

（2）社会情動的選択性理論（Socioemotional Selectivity Theory; 以下 SST）

SST は Carstensen（2006）により提唱された時間的展望の知覚と人の思考や行動の関連を説明する理論の一つであり，時間的展望が動機づけにおいて重要な役割を果たし，その縮小により目標設定や個人の選好，注意や記憶のような認知過程が変化するとされている。つまり，未来の時間的展望において自身の時間を有限と知覚するか無限と知覚するかにより，個人の考えや行動が影響されることを指摘している。たとえば，時間が無限であると認識される場合，人は情報や知識を得ることなどを優先し，情動的，情緒的満足を得られなくても，将来的に自身にとって有益となる知識や情報の獲得できる目標を設定し，選択を行う。一方，時間が有限であると認識される場合，人は将来的な利益やアドバンテージとなる情報や知識よりも現在を重視し, 自身の情動的, 情緒的満足を優先した目標を設定し，選択を行う。これは，人間関係の選択やその目的においても同様であるとされており，時間的な終わりが近づくにつれて，心理的，情緒的に満足が得られるより近しいパートナーと過ごす時間が増加し，それが日常生活における情緒調整への関心の増大と関連していることが示唆されている（Carstensen,Isaacowitz,&Charles,1999）。

これまでの研究から，未来の時間的展望は加齢とともに短くなることが明らかにされており（都筑，1982），加齢に伴い時間の有限性の知覚は増加し，時間が無限であるという知覚は減少するものと考えられ，時間的展望と年齢に関する先行研究がこのことを支持している（Fung.&Carstensen,2003；池内・長田，2013 など）。加えて，目標や選好などの変化は，加齢のみに伴って生じるのではなく，時間の有限性が知覚されるような文脈（例えば，転居，病気，戦争など）においても生じるとされている。つまり，若者であれ高齢者であれ，個人の知覚する時間の有限性が社会における目標選好を変化させるのである（Carstensen et al.,1999）。したがって，これまで態度における年齢の違い，もしくは加齢に伴う衰えの結果によるものとされてきた若者と高齢者間の数多くの差異は，SST においてはいずれによるものでもないことが明らかにされている（Carstensen,2006）。

先にあげた SOC 理論と同様に，SST も老年期の発達的特質の解明に適用されており，たとえば老年期において身体機能の低下やネガティブな経験が増加するにもかかわらず，生活へ適応し，幸福感が上昇する現象であるエイジングパラドックスを説明している（伊藤・中川，2012；権藤，2018）。

老年期という発達的特質を説明する上でのこれら 2 つの理論の有

効性について，Penningroth & Scott（2012）は若者と高齢者の個人的な目標（ゴール）がSSTとSOC理論それぞれから予測されるものと異なるかどうかについて検討したところ，両者に差異がないことを明らかにしている。このように，SSTとSOC理論は互いに全く異なる理論を展開するものではないが，池内・長田（2013b）は，SOC理論がネガティブな影響を受けた機能を補うための認知的領域を対象としている一方で，SSTは自己の情緒を充足する経験のために人間関係や行動を選択し，関係性や情動領域を対象としていることを両者の差異として指摘している。

しかしながら，高齢者特有の反応や行動をSOC理論では能力の低下や喪失の増加による適応として説明されるのに対して，SSTでは時間的展望の変化により自身が情動的な充足を得ることを目標とした積極的な選択の結果であると考えられることから，老年期のウェルビーイングを高めていく上ではSSTの観点から検討していくことがより重要であると考えられる。

４．SSTに関する日本の研究状況

SSTに関する研究は海外において数多く行われているが，日本を含むアジア諸国の人を対象とした研究は非常に少ないといわれている（池内・長田，2013）。たとえば，国立情報学研究所のCiNiiによる「Socioemotional selectivity」及び「社会情動的選択性理論」をキーワードとした検索結果でも，Table1に示すように重複内容を除くとわずかに11篇に過ぎない（検索は2020年9月に行われた）。

これらを概観すると，若年者と高齢者の比較による検討，もしくは高齢者のみの検討から，高齢者の特徴を明らかにしているものが多く，ほとんどの結果から高齢者が情動的動機づけにより肯定的感

Table 1　SSTを用いた日本における研究論文

著者	発刊年	掲載誌	対象者	研究内容	主な知見
河崎 円香・増本 康平	2009	生老病死の行動科学	高齢者	日本人高齢者が情動的広告と合理的広告のどちらを好むのか，刺激となる広告の提示と再認課題による実験を行い，記憶と評価の2側面から検討した。	単に「高齢者」だから情動的広告を好む，あるいは単に「高齢者」だから合理的広告を好むのではなく，各高齢者の認知機能が広告に対する評価において重要な役割を果たしていることが示唆された。
渡部 諭・渋谷泰秀	2011	研究結果報告書 三井住友海上福祉財団	若年者 高齢者	詐欺被害傾向と諸要因の関連性について，社会情動的選択性理論の枠組みを用いた説明可能性の検証を行った。	未来展望が高いと詐欺被害傾向が低下することが示された。また，女性群においてのみ，行動の積極性と失敗に対する不安と詐欺被害傾向に有意な正の相関がみられたことから，高齢女性の認知機能の低下が詐欺被害にあう可能性の増加に結び付く可能性が示された。
秋山 学・清水 寛之	2012	認知心理学研究	若年者 高齢者	若年者と高齢者の購買に関する自伝的記憶特性について，記憶特性質問紙（MCQ）の質問項目を含む質問紙を用いて検討した。	高齢者は必ずしもレミニセンス・バンプ（10～30歳の頃に経験した出来事が想起されやすいという現象）を示すわけではないことが明らかにされた。さらに，ポジティブであると認識される出来事は若年者でも高齢者でもより多く想起された。
池内 朋子・長田 久雄	2013a	老年学雑誌	高齢者	Future Time Perspective Scaleの日本語版の作成を行った。	Future Time Perspective Scaleの日本語版の作成を行った。尺度の2因子構造，信頼性，妥当性が検証され，利用可能であることが示された。
加藤 公子・木村 ゆみ・吉崎 一人	2014	愛知淑徳大学論集 ―心理学部篇―	高齢者	ワーキングメモリ課題において，ポジティブもしくはニュートラルなディストラクターをターゲットと同時に提示し，高齢者の注意制御の特徴を社会情動的選択性理論の観点から検討した。	高齢者は積極的にポジティブな情報を取り込もうとする動機づけにより，課題とは全く無関連な刺激であってもそれがポジティブな意味をもつ刺激であれば処理を促進させる傾向が認められた。
上野 大介・権藤 恭之・佐藤 眞一・増本 康平	2014	認知心理学研究	若年者 高齢者	感情価が顕在記憶と潜在記憶に及ぼす影響に関する年齢差の検討のため，ポジティヴ，ネガティヴ，ニュートラルの写真をニュートラルの単語の直前に提示し，単語を記銘する実験を行った。	顕在記憶では若年者群のネガティヴ条件の成績が高く，高齢者群にポジティヴ優位性が確認された。潜在記憶では両年齢群ともポジティヴ条件とネガティヴ条件の成績がニュートラル条件の成績よりも高かった。これらの結果は，ポジティヴ優位性が意図的な処理で生起していることを明らかにし，社会情動的選択性理論を支持するものであった。
澤岡 詩野	2014	応用老年学	後期高齢者 男性	後期高齢者である企業退職者がインターネットをどのように位置づけているかについて，半構造化面接によって得られたデータをM-GTAを用いて分析，検討した。	残された人生の時間を有限と知覚する時間的展望が人間関係の選択に影響を及ぼすとともに，インターネット利用の位置づけも異なるものであった。
木村 年晶・内山 伊知郎	2015	健康心理学研究	大学生 前期高齢者 後期高齢者	高齢者の保有する親密な関係と幸福感の関連について，親密度をサークル上に配置された直接的な距離として測定し，さらに親密度とは別に情動価を測定し，検討した。	肯定的な感情を持つ他の人との相互作用を選択することが高齢者の主観的幸福感に必要であるということが示唆され，社会情動的選択性理論を支持するものであった。
進藤 将敏	2017	青森暁の星短期大学研究紀要	若年者 高齢者	社会情動的選択性理論に基づいた，高齢者が嘘の情報を本当の情報と誤って想起しやすい心理的メカニズムの解明のため，①真偽情報の提示と再認課題，②短期記憶課題の2つを実施し，検討した。	記憶機能を認知的資源として活用することに限界が生じやすい高齢者について，情動価（楽観性）を伴った認知的資源が誘発されることが考えられ，社会情動的選択性理論の知見と整合するものであった。
吉川 裕子	2017	福祉社会開発研究	独居高齢者	生活環境への新たな適応が，独居高齢者のソーシャルサポートにどのような影響を与えるのか，半構造化面接により得られた内容を質的データ分析法を用いて分析した。	独居高齢者は自身の残存機能での適応が困難になると，他者の能力を査定しサポート可能性を推測していること，また，謝意を伝えることにより，協力的な人間関係を実現し，肯定的な感情を得ていると考えられる。
榊原 良太	2018	感情心理学研究	成人全般	個人の主観的な人生の残り時間を直接的に測定し，感情制御や幸福感，人生満足度などの心理的変数との関係を検討し，SSTについての検証を行った。	主観的な人生の残り時間の「短さ」が，適応的な感情抑制の使用を促すというSSTの仮定を検証したが，結果はSSTの仮定を支持するものではなく，今後の理論的な再考を迫るものであると言える。

情，不安を解消する行動や人間関係を選択していること，高齢者の認知処理過程においても肯定的（ポジティブ）なものの優先順位が高くなることが示唆され, SST が支持されている。唯一, 榊原（2018）が SST に対して疑義を呈するにとどまった。

また，実験やインタビュー調査では，対象者数が少なく，得られた結果については慎重な解釈が求められるものも含まれていた。さらに，SST においては時間的展望が重要な概念となるにもかかわらず，変数として取り上げていない研究も複数見られており，これらでは時間的展望が年齢と関連することを前提とした検討，解釈がなされていた。加えて，主として加齢による変化を認知，情動，行動という側面から検討されており，これらの論文の掲載誌に発達心理学関連の学会誌がないように，発達心理学的観点からの検討が必ずしも十分になされていないことが示唆された。

研究の量からいえば，池内・長田（2013b）が 2012 年に CiNii 及び社会老年学文献データベース DiaL を用いて行った同様の検索ではヒットが 2 件のみであったことを踏まえると，日本における SST に関わる研究がわずかながら増加しつつあるといえる。また，当初 SST は対人関係や行動の変化を説明する理論として展開されていたが，その後主観的幸福感や健康行動との関連（中川，2010），認知情報処理モデルにおける適用（権藤，2018）など研究範囲は広がってきており，今後もさらなる発展が期待されるところである。

５．SSTに基づく老年期の発達的検討の必要性

SST を用いた海外での研究でも，未来展望における時間の有限性を条件づけた検討において，年齢に関係なく時間的展望による動機づけが生じ，目標や人間関係の選択が影響されることが実証されている。しかしながら，転居や卒業などある種の時間的な限界を状況として設定するような統制された条件下の検討だけでは，現実社会でリアリティをもって生活する個人を理解することはできないといえる。つまり，発達のプロセスで出会う生活や人生における出来事の中で，個人が時間の有限性をどのように感じているのか，それが動機づけや行動にどのような影響を及ぼすのかを検討することが，SST の観点から発達を捉えるために有用であると考えられる。特に，喪失や低下といった時間の有限性を認識しやすいとされる中年期以降のライフイベントについて，SST を用いた実証的研究の蓄積が求められるといえよう。さらには，検討内容に中年期以降の心理社会的発達課題である Generativity や自我の統合を取り上げることにより，これまでの研究との比較による多面的検討が可能となり，より広い発達心理学的知見がえられるものと考えられる。

先に述べたように，未来展望に関しては年齢とともに狭まっていくことがすでにこれまでの研究から明らかにされているが，たとえば子どもの自立，親や配偶者の死などの中年期以降のライフイベントを経験する年齢は個人によって異なるため，未来展望について年齢による変化を統制することができず，年齢だけを要因として検討し，解釈することは問題があると思われる。この問題を解決するためにも，多くの個人が共通して喪失や低下を経験する中年期～老年期の発達的検討を行うためには，年齢だけでなく，日本においては定年退職などを含む標準的，個人的ライフイベントを変数に組み入れ，SST を用いた検討を行うこと重要であると考えられる。

引用文献

秋山 学・清水 寛之（2012）. 購買に関する自伝的記憶の特性：若齢者と高齢者における時間的分布とポジティブ優位性硬化に関連して　認知心理学研究，*10*，67-79.

Baltes, P.B.(1997).On the Incomplete Architecture of Human Ontogeny: Selection, Optimization, and Compensation as foundation of developmental theory.*American psychologist, 52,* 366-380.

Carstensen,L.L.(2006). The Influence of sense of time on human development,Science,*312*,1913-1915.

Carstensen,L.L.,Isaacowitz,D.M.,&Charles,S.T.(1999). Taking time seriously: A theory of socioemotional selectivity. *American Psychologist*, *54*, 165-181.

Erikson,E.H.(1950). Childhood and society. New York,Norton.（エリクソン ,E.H. 仁科 弥生（訳）(1977). 幼児期と社会Ⅰ　みすず書房）

Erikson,E.H.(1959). Identity and the life cycle. New York : W.W. Norton.（エリクソン ,E.H. 西平 直･中島 由恵（訳）(2011). アイデンティティとライフサイクル　誠信書房）

Erikson, E. H., & Erikson, J. M. (1997). The life cycle completed. New York: W. W. Norton.（エリクソン ,E. H.・エリクソン ,J. M.　村瀬 孝雄・近藤 邦夫（訳）(2001).　ライフサイクル，その完結 みすず書房）

福島 朋子・沼山 博（2019）. 子どもを持たない中年期成人における世代性と主観的幸福感　心理学研究，*89*，551-561.

Fung,H.H., & Carstensen,L.L.(2003). Sending Memorable Messages to the Old: Age Differences in Preferences and Memory for Advertisements, *Journal of Personality and Social Psychology, 85,*163-178.

権藤 恭之（2018）. 心理的加齢と脳の加齢の関係　老年精神医学雑誌，*29*，742-748.

権藤 恭之・中川 威・石岡 良子（2017）. 老いと闘うか？老いと共生するか？―こころのアンチエイジングはありうるのか　医学のあゆみ，*261*，668-672.

Hannah,M.T., Domino,G., Figueredo,A.J., & Hendrickson,R. (1996). The prediction of ego integrity in older persons. *Educational and Psychological Measurement,56,* 930-950.

原田 一郎（2001）. 高齢者の時間的態度と主観的幸福感の関連について　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要，*48*，153-161.

日潟 淳子・岡本 祐子（2008）. 中年期の時間的展望と精神的健康との関連：40 歳代 ,50 歳代 ,60 歳代の年代別による検討　発達心理学研究，*19*，144-156.

堀内 和美（1993）. 中年期女性が報告する自我同一性の変化―専業主婦，看護婦，小・中学校教師の比較―　教育心理学研究，*41*，11-21.

五十嵐 敦・氏家 達夫（1999）. 中年期における心理社会的身体的変化に対する適応過程に関する縦断的研究―中年期の目標・希望からみた時間的展望の様相についての分析―　福島大学生涯学習教育研究センター年報，*4*，27-37.

池内 朋子・長田 久雄（2013a）. 未来展望尺度の作成：Future Time Perspective Scale 日本語版　老年学雑誌，*4*，1-9.

池内 朋子・長田 久雄（2013b）. 社会像動的理論の研究に関する文

献的展望―時間的展望を中心として―　応用老年学，*7*，51-59.

伊藤 正哉・中川 威（2012）. 高齢者ほど自分らしく生きている：老年的超越理論からみたエイジング・パラドックス　*Anti-aging medicine*，*8*, 370-374.

柏尾 眞津子（2000）. 高齢者の時間的展望　藤村 邦博・大久保 純一郎・箱井英寿（編）青年期以降の発達心理学（pp.137-160）北大路書房

河崎 円香・増本 康平（2009）. 高齢者の好む広告とワーキングメモリとの関連の検討：社会情動的選択性理論の観点から　生老病死の行動科学，*14*，23-32.

木村 年晶・内山 伊知郎（2015）. 社会的相互作用の親密度及び情動価と高齢者の主観的幸福感の関連―情動価を用いた社会情動的選択理論の検討―　健康心理学研究，*28*，23-32.

高齢者に関する定義検討ワーキンググループ（2017）. 高齢者に関する定義検討ワーキンググループ報告書　日本老年学会・日本老年医学会　Retrieved from https://www.jpn-geriat-soc.or.jp/info/topics/pdf/20170410_01_01.pdf（2020 年 9 月 10 日）

厚生労働省（2020）. 令和 2 年版高齢社会白書

Lewin,K. (1951). Field theory in social science: Selected theoretical papers. New York: Harper & Brothers.（レヴィン ,K.　猪俣 佐登留（訳）（1979）. 社会科学における場の理論　誠信書房）

丸島 令子（2000）. 中年期の「生殖性（Generativity）」の発達と自己概念との関連性について　教育心理学研究，*48*，52-62.

増本 康平（2014）. 情報処理機能の変化　佐藤 眞一・高山緑・増本 康平　老いのこころ　―加齢と成熟の発達心理学―（pp.65-83）有斐閣

McAdams,D.P.,& Aubin,E.S.　(1992). A theory of generativity and its assessment through self-report,behavioral acts and narrative themes in autobiography. *Journal of Personality and Social Psychology,62*,1003-1015.

宮田 義勝（2001）. 中年期の自我同一性の発達　発達人間学論叢, *4*, 53-63.

内閣府（2015）. 平成 26 年度 高齢者の日常生活に関する意識調査結果

中川 威（2010）. 高齢期における心理的適応に関する諸理論　生老病死の行動科学，*15*，31-39.

野村晴夫（2002）. 高齢者の自己語りと自我同一性との関連―語りの構造的整合・一貫性に着目して―　教育心理学研究，*50*，355-366.

岡本 祐子（1985）. 中年期の自我同一性に関する研究　教育心理学研究，*33*，295-306.

岡本 祐子（2018）. 21 世紀のアイデンティと世代継承性―その視点と課題―　岡本 祐子・上手 由香・高野 恵代（編著）　世代継承性研究の展望　アイデンティティから世代継承性へ（pp.3-19）ナカニシヤ出版

小澤 義雄（2012）. 老年期の Generativity 研究の課題―その心理社会的適応メカニズムの解明に向けて―　老年社会科学，*34*，46-56.

Penningroth,S.L.,& Scott,W.D.(2012). Age-related differences in goals: Testing predictions　from selection, optimization, and compensation theory and socioemotional selectivity theory. *Aging and Human Development, 74*,87-111.

榊原 良太（2018）.「老い先短い」と感じるほど感情制御は向上するのか？―Socioemotional Selectivity Theory に対する批判的検討―　感情心理学研究，*26*，22.

讃井 真理･河野 保子（2014）. 高齢者の Generativity における「関心」の特質，および高齢者の生活に及ぼす Generativity の検討　看護学統合研究，*16*，6-17.

佐藤 眞一（2007）. 生涯発達とその研究法　谷口 幸一･佐藤 眞一（編著）エイジング心理学　老いについての理解と支援（pp.19-35）北大路書房

沢岡 詩野（2014）. 都市部の企業退職者の社会活動と社会関係におけるインターネットの位置づけ－後期高齢期にあるシニア情報生活アドバイザー資格取得者の語りから　応用老年学，*8*，31-39.

下仲 順子（1988）. 老人と人格―自己概念の生涯発達プロセス―　川島書店

進藤 将敏（2017）. 高齢期における記憶違いと楽観性の関連　青森明の星短期大学研究紀要，*43*，1-11.

白井 利明（1997）. 時間的展望の生涯発達心理学　勁草書房

白井 利明（2007）. 発達　都筑 学・白井 利明（編）時間的展望研究ガイドブック（pp.53-68）ナカニシヤ出版

園田 直子（2007）. 自己　都筑 学・白井 利明（編）時間的展望研究ガイドブック（pp.97-108）ナカニシヤ出版

丹下 智香子・西田 由紀子・富田 真紀子・安藤 富士子・下方 浩史（2013）. 中高年者に適用可能な死に対する態度尺度（ATDS-A）の構成および信頼性・妥当性の検討，日本老年医学会雑誌，*50*，88-95.

都筑 学（1982）. 時間的展望に関する文献的研究　教育心理学研究，*30*，73-86.

上野 大介･権藤 恭之･佐藤 眞一･増本 康平（2014）. 顕在記憶指標・潜在記憶指標を用いたポジティヴ優位性に関する研究　認知心理学研究，*11*，71-80.

渡部 論・渋谷 泰秀（2011）. 振り込め詐欺被害に遭いやすい高齢者の認知バイアスの研究―社会情動的選択性理論の観点からの認知心理学研究―　三井住友海上福祉財団研究結果報告書：交通安全等・高齢者福祉 , *17*，153-156.

山口 智子（1996）. 高齢者の回想：主観的幸福感・時間的展望との関連　名古屋大學教育學部紀要，*43*，163-173.

吉川 裕子（2017）. 新たな環境適応が独居高齢者のソーシャルサポートに及ぼす影響―インタビュー調査の分析を通して―　福祉社会開発研究，*12*，123-133.